

# 質問紙調査に基づく大学生の CiNii Articles 利用行動の分析

—CiNii Articles で発見・入手できない文献への対応を中心に—

佐藤翔・森仁樹・笹井梨衣・布留川真依・濱口美果・井上友希子

---

## 1. はじめに

本研究の目的は質問紙調査を通じて、大学生の CiNii Articles 利用実態について、学生本人の認識の面から明らかにすることである。とりわけ CiNii Articles での情報探索がうまくいかなかった場合に学生はどのように対応しているのかを、学問領域、レポート作成時等の資料の利用行動、CiNii Articles に対するなじみ深さとの関係を中心に分析する。

### 1.1 CiNii Articles の概要

CiNii Articles は国立情報学研究所 (NII) が運営する、論文情報サービスである。2005年に、それまでに NII が運用していた NACSIS-IR (文献情報データベース)、NACSIS-ELS (学術雑誌等の本文電子化サービス) を統合する形で発足したものであり、2011年10月時点で、約1,500万本の文献データを保有、うち約370万本については本文ファイルを有する、国内最大の学術文献データベースとなっている<sup>(1)</sup>。2007年4月に Google との連携を開始した (Google から文献情報等が検索できるようにした) ことをきっかけに検索・本文ダウンロード数が急増し、2年後の2009年4月に行ったユーザインタフェースの大規模リニューアルによってさらに利用を伸ばし、2011年7月時点では月間約700万回のデータベース利用、250万回以上の文献本文ダウンロードが行われていた<sup>(2)</sup>。2011年11月には NACSIS-Webcat と統合し、目録所在情報サービス (NACSIS-CAT) に蓄積されたレコードを利用する CiNii Books と、従来の学術文献データベース部分である CiNii Articles の二つのサービスをほぼ同様のインタフェース下で提供している。

CiNii Articles の特徴として、文献に関する書誌情報だけでなく、本文ファイルへのリンクを多数提供していることが挙げられる。NACSIS-ELS 由来の学協会刊行物や

大学等の研究紀要等、NII 自身が管理するサーバ上に本文ファイルが存在する文献が約370万件（2011年8月時点、以下同様）あることに加え、大学等の提供する機関リポジトリ（約58万件）、科学技術振興機構が運営する電子ジャーナルデータベースであるJ-STAGE（約43万件）、応用物理学会電子ジャーナル（約6万件）等の外部サービスと連携し、CiNii Articles の検索結果から直接本文を入手できるよう、リンクを提供している<sup>(3)</sup>。これらのリンクは利用者から良くクリックされているという調査もあり<sup>(4)</sup>、また CiNii Articles（2011年以前は CiNii）利用者を対象に NII が毎年行っているオンライン調査でも、サービス開始当初の2006年を除いて一貫して CiNii Articles の利用目的としては本文を入手するため、とする回答が最も多い<sup>(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)</sup>。ここから、CiNii Articles は単なる書誌データベースとしてではなく、文献本文の入手手段としても利用されていることがうかがえる。

## 1.2 CiNii Articles の利用者像

CiNii Articles の利用者像に関する分析としては、上述の NII 自身によるオンライン調査、学術図書館研究委員会（SCREAL）が2007年に実施した日本の研究者・大学院生を対象とする質問紙調査<sup>(12)</sup>、佐藤による CiNii Articles のアクセスログ分析<sup>(4)(13)</sup>などが挙げられる。

### （1）NII によるオンライン調査<sup>(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)</sup>

NII によるオンライン調査は Web 上で回答を呼びかけている調査であり、かつ CiNii Articles 自身のリンクを通じて回答を呼びかけているためヘビーユーザに回答が偏っていると考えられるが、それだけに CiNii Articles を頻繁に利用する層の実態を知る上では役立つものとなっている。結果を見ても、7年間を通じて CiNii Articles の利用頻度については「ほぼ毎日」と「月に数回は利用する」とする回答があわせて80%前後を占めており、CiNii Articles を日常的に利用する者の実態を表す調査となっていると考えられる。

回答者の身分については、7年間一貫して学生（大学院生）が30～40%前後、大学教員が15%前後を占めていた。CiNii Articles を使って検索する分野については、7年間一貫して人文学とした回答者が最も多かった。ただし、必ずしも人文学領域のみが支配的なわけではなく、例えば2012年の調査結果では人文学領域とする回答者481人に対し、工学239人、医学197人、理学154人、経済学114人等、理工系や社会科学系領域を挙げる回答者も多い。また、回答者自身の所属分野としては一貫して心理学（2012年は58人）とする者が多く、様々な学問領域の利用者層が存在することがうかがえる。

また、2006年の調査では書誌情報を得るために使う、とした回答者が多かったが、

2007年以降は本文を入手するために CiNii Articles を使う、とした回答者が一貫して最も多かった。CiNii Articles の便利な点についても「論文本文へのリンクがある」ことと「論文本文の表示・印刷が無料のものがある」ことが常に1・2番目に挙げられており、逆に不便と感じる点は「論文本文へのリンクがあるものが少ない」ことと「論文本文の表示・印刷が無料のものが少ない」ことが常に1・2番目に挙げられていた。

以上のように、NIIによるオンライン調査の結果から、CiNii Articles を日常的に利用するのは学生・大学院生・研究者であり、学問領域としては人文学系が多いものの、理工系や社会科学系など多様な領域から利用されている。利用目的は当初は書誌データの入手であったが、現在は文献本文を入手することになっていることがうかがえる。

## (2) SCREAL2007調査<sup>(12)</sup>

学術図書館研究委員会 (SCREAL) が2007年に実施した、日本の研究者・大学院生を対象とする質問紙調査の中で、回答者が「よく使う」電子的二次情報サービスについて、分野・身分を分けて尋ねている。SCREAL 調査もオンラインで回答を呼びかける形式のものであったが、NIIによる調査とは異なり CiNii Articles 利用者のみを対象とするものではなく、また回答は大学ごとに教員・大学院生に対し送信したメールを通じてのみ行えるものであることから、NIIによるオンライン調査に比べると回答者の偏りは少ないと考えられる。

SCREALによる調査では CiNii Articles (調査実施当時の名称は CiNii) の利用者数は回答者全体の中では PubMed、Web of Science に続く第3位 (回答者の18.3%が利用) であり、人文社会系では教員・大学院生ともに CiNii を第1位に挙げていた (教員で40.4%、大学院生で46.7%が「よく使う」と回答)。自然科学系では教員で第6位 (10.8%)、大学院生で第4位 (19.0%) にとどまっておき、上位10位以内には入っているものの必ずしもよく使われるサービスになっているわけではない。さらに細かく分野を分けて見ると、CiNii は人文学では雑誌記事索引 (46.3%) に続き2番目 (43.2%)、社会科学分野では雑誌記事索引を凌いで1番目 (46.0%) に使われるサービスとなっていた。他には複合新領域 (科学研究費補助金の分野による) でも CiNii 利用者が最も多かった (35.8%)。他に工学、農学、総合領域 (情報学が含まれる) で CiNii が3番目に利用されていた一方、化学では9番目と比較的順位が低かった。

なお、SCREAL 調査は2011年にも実施されているが、2007年調査と同様の「よく使う」電子的二次情報サービスに関する調査結果は公開されていない<sup>(14)</sup>。

## (3) CiNii Articles のアクセスログ分析<sup>(4)(13)</sup>

佐藤は CiNii Articles (調査当時の名称は CiNii) の2010年12月のアクセスログを用い、

書誌データへのアクセス状況とその後の文献本文へのリンクのクリック状況を分析している。その中で文献の掲載雑誌の属する学問領域との関係も明らかにしており、CiNii Articlesの利用者像の一端をうかがえるものとなっている。

佐藤の分析によれば書誌データへのアクセス数の面で見ると、人文社会系の雑誌へのアクセス数は1ヶ月間で637,503件であり、理工系(1,104,991件)や生物系(1,434,496件)に比べて必ずしも多いわけではない。一方で、利用者がアクセスした書誌データから文献本文へのリンクがあった場合、人文社会系の文献ではクリックされる割合が非常に高い(NII-ELSへのリンクの90.0%がクリックされる)一方、理工系(クリック率37.9%)、生物系(クリック率26.4%)ではクリックされる場合の方が少ない。人文社会系の中では特に社会科学分野(クリック率97.8%)が高いが、人文学分野(クリック率67.8%)も過半数のリンクがクリックされていた。ここから、人文社会系においてはCiNii Articlesが文献本文の入手手段として理工系や生物系よりも活用されている、と佐藤は推察している。

以上のいずれの研究においても、CiNii Articlesは人文社会系領域で二次情報データベースあるいは文献本文の入手手段として活用されていることが示唆されている。理工系や生物系の場合、原著論文の多くは英語で書かれ、日本以外の国で発行される電子ジャーナルに掲載されており、それらの情報を検索するデータベースも、本文の入手手段となる電子ジャーナルプラットフォームも、海外から提供されるものが存在する。一方で日本語での論文執筆が行われ続けている人文社会系分野においては、CiNii Articles以外に必ずしも網羅的なデータベースや本文入手手段が存在せず、それらの領域にとって特にCiNii Articlesが大きな役割を果たしているものと考えられる<sup>1</sup>。

### 1.3 CiNii Articlesの限界とそれに伴う問題

#### (1) 文献収録範囲と本文提供状況の限界

人文社会系を中心に文献探索・入手の手段としての存在感を高めている一方で、CiNii Articlesには限界も存在する。特にCiNii Articlesの重要性が増したことにより問題となっているのが、収録文献の範囲と、本文へのリンクの付与状況である。

前述のとおりCiNii Articlesは複数の情報源から書誌データを収集・統合して提供しているが、このうち2大情報源のうち一つであるNII-ELS(旧NACSIS-ELS)は電子図書館サービスに協力した学協会等を対象とするものであり、学協会の自発性に基づくもので、網羅性を保証するものではない。もう一つの主要な情報源である雑誌記事索引データベース由来のデータについては比較的網羅性が高いものと考えられるが、国立国会図書館が継続的に受け入れていない雑誌は採録対象にならない等の漏れもあると

考えられる<sup>(15)</sup>。

実際に CiNii Articles への文献情報収録状況を調査したものの代表例としては、人文学領域を対象とする後藤による一連の調査が挙げられる<sup>(16)(17)(18)</sup>。後藤は2007年に国文学・宗教学分野等を対象に、当該分野のデータベースと CiNii Articles を同一のキーワードで検索し結果を比較し、出版元の機関によっては紀要／年報類が CiNii Articles に収録されていない場合があることを指摘している。また、2008年・2010年と2度にわたり、日本歴史学分野を対象に、研究開発支援総合ディレクトリ ReaD に研究者の業績として掲載された文献の CiNii Articles 収録状況を調査し、書籍や一般雑誌掲載文献のほか、小規模機関の紀要については雑誌自体の収録がないこと、大学付属研究所や博物館紀要については雑誌自体は収録されていても出版年の古い文献の収録がない場合があること等を指摘している。

後藤同様に人文学領域を対象とする調査としては、日詰らによる日本語学・日本文学・人文地理学・日本語教育分野を対象とする研究がある。日詰らは2009年に、ReaD に研究者が業績として登録していた雑誌（文献単位ではなく雑誌単位）の CiNii Articles への収録状況を調査している。結果から、これら4分野については紀要の方がデータ収録率・本文提供率とも高く、その理由として機関リポジトリでのコンテンツ公開の影響を指摘している<sup>(19)</sup>。

人文学領域以外では、江草らによる教育分野の文献データベースである教育研究論文索引と CiNii Articles の収録文献の重複率調査があり、教育研究論文索引に収録された164,643件のレコードのうち、59～63%は CiNii Articles にも収録されていることを指摘している<sup>(20)</sup>。ただし、調査の主旨は重複状況の機械的同定の精度にあり、重複レコードがどういった文献であるか、といった詳細分析は行われていない。

以上のように、CiNii Articles は収録書誌データ数は多いものの、全ての分野・領域等の文献を収録しているわけではないことがわかっている。また、本文へのリンクの付与状況についても問題があることが指摘されている。前述の佐藤のアクセスログ分析によれば、2010年12月に書誌データへのアクセスがあった文献のうち、75.9%には本文等へのリンクが存在した。しかし本文等へのリンクの有無については文献掲載誌の分野によって大きな差があり、生物系では90%以上、理工系でも約80%の文献に本文等へのリンクが付与されている一方、人文社会系では半数以上（57.5%）の文献に本文等へのリンクが付与されていなかった。さらに内訳を見ると社会科学分野では55.6%、人文学分野では61.8%の文献が本文等へのリンクを付与されていなかった<sup>(13)</sup>。1.2で触れたとおり、CiNii Articles の主な利用者層は人文社会系であり、文献本文等の入手手段として利用しているが、その主たる利用者層である人文社会系に対する文献本文の提供が最も進んでいないと言える。これも前述のとおり、CiNii Articles の利用者調査で「論文本文へ

のリンクがあるものが少ない」ことと「論文本文の表示・印刷が無料のものが少ない」が主たる不満点として挙げられているのも、この状況を反映してのことと考えられる。

## (2) オンラインで利用可能な文献への学生の偏重

1.3(1)で示した CiNii Articles の限界（収録文献の範囲・本文提供状況の限界）に伴い問題となるのが、大学生の CiNii Articles への偏重、あるいはオンラインで利用可能な文献への偏重である。

オンラインで利用可能な文献は、オンラインで提供されていない文献に比べて引用される回数が多いことは電子ジャーナルの普及以降たびたび指摘されている<sup>(21)(22)(23)</sup>。単にオンラインで提供されているだけではなく、複数のサーチエンジン等で発見可能であることが被引用数に影響するとした調査結果もあらわれており<sup>(24)</sup>、オンラインで容易に入手できることは他の論文を引用して新たな論文を執筆するような研究者の行動に対してすら、影響を与えると考えられている。それでも研究を生業とする研究者であれば、必要と判断した論文はオンラインで入手できなかったとしても手に入れようとするだろうと考えられるが、実際には自機関で購読していない雑誌に掲載された論文については入手をあきらめる研究者もいることが指摘されている<sup>(25)(26)</sup>。まして必ずしも研究の専門家というわけではない学生の場合、レポートや卒業論文等を執筆する際に、オンラインで入手できない文献については印刷媒体の雑誌を閲覧したり文献複写で入手しようとするをせず、オンラインで閲覧できる範囲のみで調査研究を済ませようとする者も一定数、存在していることが考えられる。

人文社会系の場合、調査研究に用いる文献のオンラインでの主たる入手手段は CiNii Articles となるが、前述のとおり CiNii Articles における人文社会系の本文提供率は必ずしも高くはない。さらに佐藤の研究によれば、CiNii Articles では人文社会系の学術雑誌掲載論文へのリンク率が低く、一方で機関リポジトリへのリンク率は他の領域より高いこともわかっている<sup>(13)</sup>。機関リポジトリで提供される文献の多くは大学・研究機関等が発行する紀要であることから、CiNii Articles で提供される人文社会系の文献本文の中にはオンラインで入手できない文献も含めた場合に比べ、紀要論文が多く、学術雑誌論文が少ないと推測される。その結果、オンラインで入手できる文献のみで研究等を行おうとする学生は、印刷媒体も含めて利用しようとする者に比べ、より紀要論文に依ることになる。実際に近年、学術雑誌掲載論文のオンラインでの提供状況が不十分である一方で、オンラインで提供される論文等のみを用いようとする学生が存在するとも指摘されており<sup>(27)</sup>、目を通すべき主要論文に触れない学生が現れることを危惧する意見もある。また、CiNii Articles が法定停電のために稼働を停止した際に、多くの学生と考えられる利用者から、自身の卒業論文等への影響を危惧する意見が挙げられたことか

らも<sup>(28)</sup>、逆説的に CiNii Articles を通じてオンラインで入手可能な文献に学生が依存しつつある状況がうかがえる。

## 1.4 本研究の目的

ここまでで示した CiNii Articles の限界と問題点のうち、収録文献範囲等の限界については調査結果に基づき確かめられた事実である。しかし学生が CiNii Articles に依存し、オンラインで入手可能なものに強く依拠するようになっていないのか、というのは状況証拠と印象的なエピソードに基づく推測に過ぎない。実際に現在の大学生が CiNii Articles で提供されるオンライン文献に依存するようになっていないのか否かは、学生の CiNii Articles 利用行動やレポート・論文執筆時の行動等を調査しなければ明らかにはならないが、これまでこのような観点から学生の CiNii Articles 利用行動等を分析した例は存在しない。

そこで本研究では、質問紙調査に基づき、大学生の CiNii Articles 利用行動について、とりわけ必要な文献が CiNii Articles では発見できなかったり、発見した文献が CiNii Articles からリンクされていなかった場合に注目した分析を行う。分析結果から、前述のような CiNii Articles への依存傾向があるのか否か、仮にあるとすれば依存傾向と関係のあるなんらかの要因（学問領域、学生自身のレポート執筆時の行動、CiNii Articles へのなじみ深さ等）があるか否かを明らかにする。

## 2. 調査方法の概要

### 2.1 調査対象・方法

本研究では2013年6～7月に実施した、同志社大学に在籍する学生を対象とする文献探索に関する質問紙調査のデータを用い分析を行った。同調査は文献探索に関わる行動全般を対象とするものではあるが、主として CiNii Articles の利用に関する質問項目から構成されている。CiNii Articles での文献探索がうまくいかなかった場合の対応に関する設問も含まれており、本研究の目的に合致したデータであると考えられる。

#### (1) 調査対象

調査対象は同志社大学に在籍する2回生以上の学生のうち、授業「図書館演習」の受講者78名、著者らの知人を通じた雪だるま式のサンプリングによって集めた回答者157名の計235名である。

回答者を2回生以上としたのは、調査を実施した春学期の時点で、最低でも1件以上のレポート執筆経験がある者に対象を限定するためである。本研究の目的はレポートや

論文執筆時に用いる文献の探索・入手に関する行動を明らかにすることであり、調査時点でレポート執筆の経験がない可能性のある1回生を対象に含むことは好ましくないと考えた。

また、サンプリング方法として雪だるま式を用いたのは、後述する調査仮説の1つである学問領域による行動の違いを明らかにするために、多様な学部・学科に属する学生を回答者中に含む必要があったためである。本来であればランダムサンプリングが好ましいことは言うまでもないが、現実的には学生を対象とするランダムサンプリングによる質問紙調査は名簿の入手・調査の実施が困難である。そこで佐藤・原田らが担当する授業「図書館演習」内で調査を実施したものの、同授業受講者の多くは文学部に所属しており、社会学部、神学部、心理学部、文化情報学部等の所属者も一定数いる一方で、他学部の学生はごく限られている。各学部（学問領域）の回答者を得る確実な方法としては、雪だるま式のサンプリングが最も現実的であると考えた。

## （2）質問紙の構成

質問紙本文については本稿末尾に添付する。

質問紙の構成は大きく回答者のレポート執筆時の文献探索行動等について（Q1～Q5）、CiNii Articlesの利用行動について（Q6～Q14）、CiNii Articles以外の情報源の認知・利用状況について（Q15・Q16）、回答者の属性（Q17）の4つの部分から構成される。

このうち本稿ではQ13(CiNii Articles で必要な文献が見つからなかった場合の対応)、Q14 (CiNii Articles で発見した論文がオンラインで入手できなかった場合の対応) が主たる分析の対象となり、この2問以外の CiNii Articles の利用行動、回答者のレポート執筆時の文献探索行動等、回答者の属性についての回答は、それぞれと文献探索がうまくいかなかった場合等の間関係を分析するために用いる。なお、CiNii Articles 以外の情報源の認知・利用状況については本稿では扱わない。これについては今後の研究課題としたい。

## 2.2 調査仮説

第1章で示したとおり、本研究の第一の目的は大学生がレポートや卒業論文執筆のための文献探索を行う際に、CiNii Articles に依存する傾向が実在するか否かを明らかにすることである。ここでいう CiNii Articles への依存とは、CiNii Articles を用いた文献探索で発見できる範囲の文献でレポート等を執筆しようとすることや、CiNii Articles から本文が入手できる（本文へのリンクがある）文献のみでレポート等を執筆しようすることを指す。これらの点に対応するのは末尾に添付した質問紙中のQ13(CiNii

Articles で必要な文献が見つからなかった場合の対応) と Q14 (CiNii Articles で発見した論文がオンラインで入手できなかった場合の対応) である。

さらに質問紙から得られたデータを詳細に分析するにあたり、本研究では以下の3つの仮説を立てた。

### (1) CiNii Articles の利用行動と学生の学問領域の間には関係がある

先行研究から、CiNii Articles の主たる利用者は人文社会系の研究者もしくは学生であることがわかっており、本研究のデータでも同様の傾向があるものと考えられる。

一方で、オンラインで入手可能な文献の割合については理工系や生物系等、英語論文が主たる情報源であり、電子ジャーナルが普及している学問領域の方が高く、人文社会系の方が少ない<sup>(25)</sup>。この傾向は前述のとおり CiNii Articles でも同様であり、人文社会系の方が CiNii Articles を通じて文献本文を入手できる可能性が低い。このような文献探索時に本文へのリンクが発見できないものの割合がどの程度あるかの差は、発見した論文がオンラインで入手できなかった場合の判断に大きく影響するものと考えられる。

### (2) CiNii Articles の利用行動と学生のレポート等執筆時の行動の間には関係がある

学問領域そのものの影響のほか、特に大学生の場合、所属する学部等の授業の中でどのようなレポートを課され、それにどのような文献を用いて対応するかの傾向の違いも、CiNii Articles の利用行動に大きく影響するものと考えられる。

一般的に、人文社会系の分野では早期から自身で文献探索等を行い、発見した文献に基づいて意見を述べることを課すレポートが出題される。一方で、理工系や生物系では教科書等のみに基づいた講義の内容理解を問うレポートや、実験・観察を行った結果に関するレポート等が多く、必ずしも自身で文献探索等を行う必要がない場合もある。また、文献等の探索や引用が必要な場合でも、主として雑誌論文等を用いるのか、主として図書を用いるのか、1～2件程度の文献に基づいて執筆すれば良いのか、網羅的な文献探索が必要なのかといった違いが存在し、それが CiNii Articles 利用行動にも影響しているのではないかと考えられる。例えば主として雑誌論文等を用い、引用文献の数は問われないレポートが多い場合にはオンラインで手に入る文献のみを選んで用いるようになるが、網羅的な文献探索が求められるレポート等が多い場合には印刷媒体でしか手に入らないものも手に入れようとする、あるいは図書の引用が多い場合には図書館に赴く必要があるため印刷媒体の雑誌もあわせて閲覧する傾向が現れる、といったことが推測される。

このようなレポート執筆時に求められる行動については学問領域と強く関係している

と考えられるものの、実際には上述のようなステレオタイプにとどまらず、領域内でも学部等によって細かい差異が存在している可能性がある。そこで学問領域による影響とは別に、レポート執筆時の行動と CiNii Articles 利用行動との関係についても分析する必要があると考えた。

### （3）CiNii Articles で入手できる以上の文献を得ようとしなない傾向と CiNii Articles へのなじみ深さの間には関係がある

学問領域やレポート執筆時の行動とは別に、回答者自身が CiNii Articles を日常的にどの程度用いているのか（どの程度なじみ深さか）もまた、CiNii Articles で入手できる以上の文献を得ようとしなない傾向との間に関係があると考えられる。

日常的に CiNii Articles を用いている者は、そうでない者に比べて CiNii Articles で得られる範囲でレポート等を終えようとする傾向があるのではないかと考えられるが、逆に CiNii Articles を日常的に用いているからこそその限界に気付き、他のツール等もあわせて使おうとする傾向があることも考えられる。このうちどちらの影響関係にあるか、あるいはなんらの影響関係も持たないかは、3章以下の分析によって明らかにしたい。

## 3. 調査結果

### 3.1 回答者の構成・特徴

2.1で述べたとおり、質問紙調査は2013年6～7月にかけて実施し、授業「図書館演習」受講者78名、雪だるま式のサンプリングによって集めた回答者157名の計235名から回答を得た。3.1節ではこれら回答者の基本的な属性と、レポート執筆時の行動等において回答者に見られる特徴をまとめる。

#### （1）学年と学部・学問領域

学年についての有効回答は227名からあった。内訳は2回生35名（15.4%）、3回生104名（45.6%）、4回生88名（38.6%）と3回生が最も多い（1回生がいないのは前述のとおり、レポート等を最低一度は執筆しているであろう者に回答者を限定するためである）。3回生が最も多いことから、レポートを執筆したことはあっても卒業論文はまだ取り組んでいない、という回答者が大半を占めると考えられる。

学部についての有効回答は229名からあった。文学部、社会学部、経済学部が多く、他学部からの回答は少ない（表1）。

学部単位では集計の分母が小さくなりすぎるため、表1を学問領域（総合領域：スポー

ツ健康科学／文化情報、人文学：文／神、社会科学：社会／経済／法／心理／商／政策／社会学研究科、生命系：生命医科、理工系：理工）にまとめ直したのが表2である。学部別で見ると文学部が最も多かったが、回答を学問領域単位でまとめ直すと社会科学分野の回答者が最も多いことがわかる。以下、学問領域別での分析は基本的に表2に示した領域単で分析を行い、表1の学部単位での分析は必要に応じて追加で行うこととする。

表1. 回答者の所属学部 (N=229)

	度 数	パーセント
文	81	34.5
社会	53	22.6
経済	39	16.6
法	9	3.8
心理	8	3.4
理工	8	3.4
文化情報	7	3.0
スポーツ健康科学	6	2.6
商	6	2.6
神	5	2.1
政策	5	2.1
生命医科	2	0.9

表2. 回答者の学問領域 (N=229)

	度 数	パーセント
総合領域	13	5.5
人文学	86	36.6
社会科学	120	51.1
生命系	2	0.9
理工系	8	3.4

## (2) レポート等執筆時の行動

表3は回答者がレポート執筆時に用いる参考文献数(回答者本人が考えるおよその値)を示したものである。参考文献は用いない、とする回答者も存在はするが、3.4%とわ

ずかである。しかし4本以上参考文献を挙げるとする者も合計で30%程度にとどまっており、大半の回答者はレポート執筆時には1～3本の文献を引用するとしている。

表3. 回答者がレポート執筆時に用いる参考文献数 (N=233)

	度 数	パーセント
0本	8	3.4
1-3本	154	66.1
4-6本	63	27.0
7-9本	8	3.4

なお、回答者がレポート執筆時に用いる参考文献数と学問領域の間には有意水準5%で有意な関係があり、人文学や社会科学領域の学生は多くの文献を引用する傾向がある(カイ二乗検定、有効回答229人、 $\chi^2=28.739$ 、 $df=16$ 、 $p=0.026$ )。

また、表4は回答者が論文を執筆する際に用いる参考文献数(回答者本人が考えるおよその値)を示したものである。多くの学生にとってはじめて書く論文は卒業論文であると考えられるが、前述のとおり回答者の多くは3回生以下であり、卒業論文を執筆した経験はないと考えられる。表4からも、論文を書いたことはないとする回答が最も多いが、書いたことがあるとする割合も約57%にのぼっている。この中には実際に卒業論文を執筆している4回生も含まれるだろうが、4回生以外の回答者で論文を書いたことがあると答えた者が、どのようなものを想定していたかは必ずしも明らかではない。ただし、表3に比べて多くの文献を引用すると答える者が多いことから、一般的なレポートとは異なるものを想定している回答者が多いこともまた確かとは言えよう。

なお、レポート執筆の場合とは異なり、論文執筆時に用いる参考文献数と学問領域の間には有意な関係は見られない(カイ二乗検定、有効回答228人、 $\chi^2=28.408$ 、 $df=20$ 、 $p=0.100$ )。

表4. 回答者が論文執筆時に用いる参考文献数 (N=234)

	度 数	パーセント
1-5本	64	27.4
6-10本	47	20.1
11-15本	11	4.7
16-20本	7	3.0
21本以上	4	1.7
書いたことがない	101	43.2

表5はレポート・論文執筆時に回答者が用いる参考文献の種類について、複数回答形式で尋ねた結果を示したものである。回答者が最もよく使っていたのは図書であり、9割以上の回答者が用いている。次いで利用されるのはWebページで、6割以上の回答者が利用している。3番目に利用が多いのが学術雑誌論文であるが、利用者は約4割と過半数を下回っている。以下、新聞記事、政府統計、一般雑誌記事の順に続く。

表5. 回答者がレポート・論文執筆時に用いる参考文献の種類（複数回答可、 $N=235$ ）

	度数	パーセント
図書	215	91.5
学術雑誌論文	98	41.7
一般雑誌記事	41	17.4
新聞記事	62	26.4
政府統計・報告書	59	25.1
判例・法令	13	5.5
特許情報	1	0.4
Web ページ	145	61.7
その他	7	3.0

なお、Web ページをレポート等に引用すると回答した145名に対し、追加でインターネットでの文献収集時に当該ページの信頼性を考慮するかを尋ねたところ（有効回答144名）、126名（86.9%）が「考慮する」と回答していた。当然といえば当然の結果であるが、逆に考慮しないとする回答者も一定数（12.4%）存在していたとも言える。

表5のうち図書、学術雑誌論文、政府統計・報告書、Web ページの利用と学問領域の間にそれぞれ有意な関係が見られる。図書は人文学分野、社会科学分野、生物系で利用が多く、他ではやや少ない（ただし全分野で60%以上が利用）（有効回答229人、 $\chi^2=18.700$ ,  $df=4$ ,  $p<0.001$ 、有意水準1%で有意）。学術雑誌論文も人文学分野で利用が最も多い（64.0%）一方で、社会科学分野で利用する者が29.2%と少なく、他分野でも利用者は限られる（有効回答229人、 $\chi^2=30.029$ ,  $df=4$ ,  $p<0.001$ 、有意水準1%で有意）。政府統計・報告書は社会科学分野で利用が多く（34.2%）、他では少ない（有効回答229人、 $\chi^2=15.238$ ,  $df=4$ ,  $p=0.004$ 、有意水準1%で有意）。Web ページは理工系（87.5%）、社会科学（74.2%）分野で利用が多く、人文学（44.2%）で少ない（有効回答229人、 $\chi^2=21.822$ ,  $df=4$ ,  $p<0.001$ 、有意水準1%で有意）。

社会科学分野で学術雑誌論文の利用が少ない、というのは研究者や大学院生を対象とする先行研究等とは異なる傾向である。社会科学分野の中には社会学部、経済学部、法

学部、心理学部、商学部、政策学部の回答者が含まれるが、このうち心理学部（回答者8名中62.5%にあたる5名が学術雑誌論文を利用）を除く全学部で、学術雑誌論文の利用は35%未満にとどまっている。政府統計等も、心理学部（0%）以外では20~50%の範囲で利用されている。また、Web ページは全学部で60%以上利用されている。ここから、学術雑誌論文の利用が少なく、政府統計等と Web ページの利用が他分野より多いという社会科学分野の傾向は、特定の学部等に引きずられたものではなく、社会科学分野の回答者一般の傾向と言える。

本節の最後に、表6は回答者がレポート・論文執筆時に用いる参考文献の探索手段について、複数回答形式で尋ねた結果を示したものである。参考文献として図書を用いる者が多いことに対応してか、図書館の検索システムを使うとする回答が最も多く、約9割にのぼる。その他には論文データベースとサーチエンジンがそれぞれ約6割と同程度、利用されている。参考図書を使う、他の文献から引用文献をたどる、知人や教員に尋ねるとする回答もあるものの、それほど多くはない（22~26%程度）。

表6. 回答者がレポート・論文執筆時に用いる参考文献の探索手段

(複数回答可、 $N=235$ )

	度 数	パーセント
図書館の検索システム(OPAC等)	209	89.3
論文データベース	137	58.5
サーチエンジン	136	58.1
参考図書(書誌・索引等)	55	23.5
図書・論文等の引用文献情報	61	26.1
教員・知人・友人に尋ねる	53	22.6
その他	3	1.3

表6のうち、図書館の検索システム(有効回答229人、 $\chi^2=16.312$ 、 $df=4$ 、 $p=0.003$ 、有意水準1%で有意)、論文データベース(有効回答229人、 $\chi^2=31.797$ 、 $df=4$ 、 $p<0.001$ 、有意水準1%で有意)、参考図書(有効回答229人、 $\chi^2=9.699$ 、 $df=4$ 、 $p=0.046$ 、有意水準5%で有意)の利用と学問領域の間には統計的に有意な関係がある。図書館の検索システムは人文学(96.5%)や社会科学(86.7%)でよく使われる一方、総合領域(69.2%)や理工系(62.5%)では過半数は超えるものの人文社会系よりは利用者が少ない。論文データベースも人文学(77.9%)で最も使われているが、こちらは社会科学分野の回答者は49.2%と利用者が過半数を下回る。参考図書については、人文学分野で31.4%と他分野より利用者が多く、社会科学分野がそれに続いて19.2%であった。

レポート等執筆時の行動と学問領域の間に関係があるであろうことは2.2節でも推測していたとおりであったが、社会科学分野で必ずしも雑誌論文やそれを探索するデータベースの利用が多いわけではない、というのは意外な傾向であった。研究者の情報利用行動に関する研究では、理工・生物系などいわゆる STM 分野が最も雑誌論文に依拠し、人文学分野は主に図書に依拠する。そして社会科学領域はその中間に位置し図書・論文の双方を用いると言われることが多い。ここから当然、社会科学分野の学生もまた人文学分野の学生よりも論文もよく使う傾向があるのではないかと推測されるが、本調査に回答した社会科学分野の学生に限れば、社会科学分野の研究者とは異なる傾向を持っていたと言えるだろう。この点については、以降の節における学問領域別の分析等においても留意しておく必要がある。

### 3.2 回答者の CiNii Articles 利用状況

3.2節では回答者235名の CiNii Articles 利用状況について、まず単純集計の結果を示す。

回答者235名中、CiNii Articles の認知に関する有効回答数は230件で、このうち CiNii Articles を知っている者は166名 (72.2%) であった。CiNii Articles を知った経緯については「授業で紹介された」(134名、有効回答160名中83.8%) がほとんどを占めていた。さらに CiNii Articles を知っていた者166名のうち86.1%にあたる143名(回答者全体の60.9%) が、実際に利用したことがあると回答していた。以下、CiNii Articles の利用に関する詳細分析はこれら143名を対象とする。

表7は CiNii Articles の利用目的について、複数回答形式で尋ねた結果を示したものである。利用目的で最も多いのはレポートのため (81.4%)、ついで授業・ゼミ等の発表のため (74.3%) であり、ほとんどの回答者が大学のカリキュラム内で課される課題等のために CiNii Articles を利用していることがわかる。

表7. CiNii Articles の利用目的 (複数回答可、N=140)

	度 数	パーセント
レポートのため	114	81.4
授業・ゼミ等の発表のため	104	74.3
卒業論文のため	34	24.3
その他	5	3.6

表8は CiNii Articles の利用頻度を尋ねた結果を示したものである。最も多いのは月1～2回とする回答者で、半数近く (46.2%) にのぼる。次いで多いのは「ほぼ使わ

ない」とする回答である (29.4%)。CiNii Articles を授業等で知り、使ったこともあるものの、日常的に使うまでに至っていない者が一定数いることがうかがえる。週1回以上の頻度で利用する者は合計24.5%程度と CiNii Articles 利用者の4分の1にとどまった。

表8. CiNii Articles の利用頻度 (N=143)

	度 数	パーセント
週4回以上	1	0.7
週1-3回	34	23.8
月1-2回	66	46.2
ほぼ使わない	42	29.4

表9は回答者の CiNii Articles に対する認識(どの程度参考になる情報が得られるか)を示したものである。「とても参考になる」「どちらかと言えば参考になる」とする回答があわせて93%以上にのぼり、CiNii Articles の利用経験がある者の中では CiNii Articles は高く評価されていることがうかがえる。なお、表8で示した利用頻度と表9の CiNii Articles に対する認識の間には、有意水準5%で統計的に有意な関係は見られなかった(有効回答143人、 $\chi^2=12.894$ 、 $df=9$ 、 $p=0.167$ )。

表9. CiNii Articles に対する認識 (N=143)

	度 数	パーセント
とても参考になる	43	30.1
どちらかと言えば参考になる	91	63.6
どちらとも言えない	8	5.6
どちらかと言えば参考にならない	1	0.7
まったく参考にならない	0	0.0

表10は本研究の中核となる設問の一つ、CiNii Articles を使っても必要な文献や参考になりそうな文献が見つからなかった(探索がうまくいかなかった)場合にどうするかを、複数回答形式で尋ねた結果を示したものである。もっとも多いのは「図書館で紙媒体の文献を調べる」という回答で、81.1%にのぼる。次いで「他のデータベースで調べる」も多い(53.8%)。「インターネットで調べる」は28.0%と少なく、「あきらめる」はさらに少なく7人、4.9%にとどまった。CiNii Articles による情報探索がうまくいかなかった場合、「あきらめる」者は存在はするが、必ずしも多くはないことがうかが

える。なお、「その他」の内訳は「教員に相談する」2件、「大学図書館のレファレンスデスクに相談する」1件である。

表10. CiNii Articles での文献探索がうまくいかなかった場合の対応

(複数回答可、N=143)

	度 数	パーセント
図書館で紙媒体の文献を調べる	116	81.1
他のデータベースで調べる	77	53.8
インターネットで調べる	40	28.0
あきらめる	7	4.9
その他	3	2.1

本節の最後に表11は CiNii Articles で発見した論文が、リンク先から入手できなかった (CiNii Articles で本文が入手できなかった) 場合の対応について、複数回答形式で尋ねた結果を示したものである。こちらは表10と大きく異なる傾向を示している。CiNii Articles で必要な文献が入手できなかった場合、最も多いのは「その論文を図書館に探しに行く」とする回答で (58.5%)、半数以上の回答者は印刷媒体を探索して文献を入手するだろうと答えている。次いで「他のデータベースで本文が入手できないか探す」とする回答も48.6%と半数近くにのぼる。しかし、その次に多いのは「本文が入手できる論文のみを利用する」という回答で、有効回答142名中45人、31.7%が選択している。あくまで複数回答設問であるので、常に、あるいは頻繁に本文が入手できないものは読まないというわけではなく、本文が入手できないものは読まないこともある、程度の認識であろうとも考えられる。しかし文献探索自体がうまくいかなかった場合に「あきらめる」とする回答に比べて、文献は見つかったも本文が入手できなければ「あきらめる」とする回答は顕著に多く、二つの対応の間には明確に差があると言えよう。

言い換えれば、CiNii Articles を使ってレポート等に必要な文献が発見できなかった場合に、そこであきらめるという回答者はわずかである。文献が見つからなければレポート等が執筆できないであろうことを考えれば、これは当然である。しかしある程度の文献が発見できれば、その中で本文が容易に (オンラインで、CiNii Articles 上から) 手に入るもののみでもレポート等を執筆することは (内容の質を問わなければ) 可能であり、そのため手に入りにくい文献は扱わないことにする、という回答者が一定数いたものと考えられる。

なお、「その他」の内訳は「複写依頼をする」2件、「他大学の図書館にあたる」1件、「教員に相談する」1件であった。

表11. CiNii Articles で文献本文が入手できなかった場合の対応(複数回答可、 $N=142$ )

	度 数	パーセント
その論文を図書館に探しに行く	83	58.5
他のデータベースで本文が入手できないか探す	69	48.6
サーチエンジン等で本文が入手できないか探す	44	31.0
本文が入手できる論文のみを利用する (本文が入手できるものがなければあきらめる)	45	31.7
その他	4	2.8

### 3.3 学問領域と CiNii Articles 利用状況の関係

3.3節では3.2節で単純集計結果を示した CiNii Articles の利用状況について、学問領域との関係を分析する。

表12は学問領域と CiNii Articles の認知状況の関係を示したものである。学問領域別に見ると、最も CiNii Articles を知っている者の割合(認知率)が高いのは人文学分野で、ほとんどの回答者が知っている(92.9%)。次いで文化情報学部が含まれている総合領域(69.2%)、社会科学分野(64.1%)で認知率が高い一方、生物系や理工系の回答者で CiNii Articles を知っている者はいなかった。この学問領域による認知率の差は有意水準1%で統計的に有意である(カイ二乗検定、有効回答225人、 $\chi^2 = 48.325$ 、 $df = 4$ 、 $p < 0.001$ )。

表12. 学問領域別の CiNii Articles 認知状況 ( $N=225$ )

	知っている	知らない	認知率(%)
総合領域	9	4	69.2
人文学	79	6	92.9
社会科学	75	42	64.1
生物系	0	2	0.0
理工系	0	8	0.0

表13は CiNii Articles を知っている総合領域、人文学、社会科学分野の回答者について、利用経験の有無を示したものである。CiNii Articles を知っている回答者の間での利用経験のある者の割合(利用率)は総合領域(100%)、人文学(91.1%)で比較的高く、社会科学(78.7%)で比較的低い。この差は有意水準5%で統計的に有意である(カイ二乗検定、有効回答163人、 $\chi^2 = 6.504$ 、 $df = 2$ 、 $p = 0.039$ )。ただし、これは CiNii Articles を知っている者に限定した場合の値であり、CiNii Articles を知らない

者も含めた分野全体での利用率は人文学分野で最も高い (84.7%)。CiNii Articles を最も認知し、利用しているのは人文学分野の回答者である一方、社会科学分野の回答者は必ずしも多くが利用しているわけではないことがうかがえる。

表13. 学問領域別の CiNii Articles 利用率 (N=163)

	利用したことがある	利用したことがない	利用率 (%) (認知者限定)	利用率 (%) (認知者以外も含む)
総合領域	9	0	100.0	69.2
人文学	72	7	91.1	84.7
社会科学	59	16	78.7	50.4

社会科学分野について、さらに学部別の利用率の内訳を見たものが表14である。CiNii Articles を認知している者の間ではどの学部も利用率が高いが、その中でも経済学部は53.8%にとどまっている。CiNii Articles を知らない者も含む学部全体の中での利用率は経済学部が顕著に低く (17.9%)、政策学部 (40.0%) や商学部 (50.0%) も比較的低い一方で、心理学部では CiNii Articles を知らなかったり、使っていない者は一人もいないという結果になっている。

このように心理学部という例外は存在するものの、全体的に見ていずれの学部も、人文学分野に比べれば CiNii Articles の利用率が低いのは確かである。心理学を除けば、回答者の中では人文学分野の方が、他の分野よりも CiNii Articles をよく利用している傾向がある。

表14. 社会科学分野の学部別の CiNii Articles 利用率 (N=163)

	利用したことがある	利用したことがない	利用率 (%) (認知者限定)	利用率 (%) (認知者以外も含む)
社会	33	8	80.5	62.3
経済	7	6	53.8	17.9
法	6	1	85.7	66.7
心理	8	0	100.0	100.0
商	3	1	75.0	50.0
政策	2	0	100.0	40.0

しかし CiNii Articles を利用する者の間では、必ずしも学問分野ごとに利用傾向の差は見られない。CiNii Articles の利用目的、利用頻度、CiNii Articles に対する認識

の全てにおいて、カイ二乗検定の結果、学問領域と各利用傾向の間には有意水準5%で有意な関係が見られなかった。

その中で、CiNii Articlesでの文献探索がうまくいかなかった場合の対応と、文献本文が入手できなかった場合の対応については、学問領域との関係が認められた。

まず表15は学問領域とCiNii Articlesでの文献探索がうまくいかなかった場合の対応の関係を示したものである。他の回答には顕著な差は見られないが、「図書館で紙媒体の文献を調べる」を選択する回答者については、人文学で90.3%と顕著に多く、社会科学が72.9%、総合領域が55.6%と続く。この差は有意水準1%で有意であり（カイ二乗検定、有効回答140人、 $\chi^2=10.215$ 、 $df=2$ 、 $p=0.006$ ）、人文学分野の回答者は他の分野より図書館に赴いて、紙媒体の文献を調べようとする傾向がある。

表15. 学問領域とCiNii Articlesでの文献探索がうまくいかなかった場合の対応の関係  
(複数回答可、 $N=140$ )

		学 問 領 域		
		総合領域	人 文 学	社会科学
図書館で紙媒体の文献を調べる	度 数	5	65	43
	パーセント	55.6%	90.3%	72.9%
他のデータベースで調べる	度 数	6	44	26
	パーセント	66.7%	61.1%	44.1%
インターネットで調べる	度 数	2	19	19
	パーセント	22.2%	26.4%	32.2%
あきらめる	度 数	0	3	4
	パーセント	0.0%	4.2%	6.8%
その他	度 数	0	3	0
	パーセント	0.0%	4.2%	0.0%

次いで表16は学問領域とCiNii Articlesで文献本文が入手できなかった場合の対応の関係を示したものである。ここでも統計的に有意な差があったのは「その論文を図書館に探しに行く」とする回答者の割合であり、人文学分野では72.2%の回答者が選択しているのに対し、社会科学分野では39.0%にとどまっている（カイ二乗検定、有効回答140人、 $\chi^2=14.639$ 、 $df=2$ 、 $p=0.001$ で有意水準1%で有意）。表15の結果ともあわせて、人文学分野の回答者は積極的に図書館を用いようとする傾向があると言えよう。

このように図書館利用の傾向には差がある一方で、CiNii Articlesで本文が入手できる論文のみを利用する、とする回答者の割合については分野による有意な差は見られな

かった（カイ二乗検定、有効回答140人、 $\chi^2=0.731$ 、 $df=2$ 、 $p=0.694$ で有意水準5%で非有意）。

表16. 学問領域と CiNii Articles で文献本文が入手できなかった場合の対応

(複数回答可、 $N=139$ )

		学 問 領 域		
		総合領域	人 文 学	社会科学
その論文を図書館に探しに行く	度 数	5	52	23
	パーセント	55.6%	72.2%	39.0%
他のデータベースで本文が入手できないか探す	度 数	6	35	26
	パーセント	66.7%	48.6%	44.8%
サーチエンジン等で本文が入手できないか探す	度 数	1	20	21
	パーセント	11.1%	27.8%	36.2%
本文が入手できる論文のみを利用する (本文が入手できるものがなければあきらめる)	度 数	3	21	21
	パーセント	33.3%	29.2%	36.2%
その他	度 数	0	3	1
	パーセント	0.0%	4.2%	1.7%

### 3.4 レポート等執筆時の行動と CiNii Articles 利用状況の関係

3.4節では3.2節で単純集計結果を示した CiNii Articles の利用状況について、レポート等執筆時の行動との関係を、(1)引用する文献数との関係、(2)用いる参考文献の種類との関係、(3)用いる参考文献の探索手段との関係、の3つに分けて分析していく。

#### (1) レポート・論文を執筆する際に引用する文献数との関係

表17はレポート執筆時に用いる参考文献数と CiNii Articles 認知状況の関係を示したものである。表から明らかに用いる参考文献数の多い回答者の方が、少ない回答者よりも CiNii Articles を知っている傾向がある。この傾向は有意水準1%で統計的に有意である（カイ二乗検定、有効回答228人、 $\chi^2=17.213$ 、 $df=3$ 、 $p=0.001$ ）。

表18は同様に論文執筆時に用いる参考文献数と CiNii Articles 認知状況の関係を示したものである（論文を書いたことがない、と回答した者は集計から除外している）。表から明らかに用いる参考文献数の多い回答者の方が、少ない回答者よりも CiNii Articles を知っている傾向がある。この傾向は有意水準5%で統計的に有意である（カイ二乗検定、有効回答129人、 $\chi^2=12.426$ 、 $df=4$ 、 $p=0.014$ ）。

表17. レポート執筆時に用いる参考文献数と CiNii Articles 認知状況の関係 (N=228)

	知っている	知らない	認知率(%)
0本	2	6	25.0
1-3本	104	48	68.4
4-6本	53	8	86.9
7-9本	6	1	85.7

表18. 論文執筆時に用いる参考文献数と CiNii Articles 認知状況の関係 (N=129)

	知っている	知らない	認知率(%)
1-5本	36	27	57.1
6-10本	35	9	79.5
11-15本	9	2	81.8
16-20本	7	0	100.0
21本以上	4	0	100.0

しかし CiNii Articles を認知している者のうち、利用経験がある者の割合は、必ずしも用いる参考文献数と明確な関係があるわけではない。レポートに用いる参考文献数と CiNii Articles 利用経験者の割合の間には有意水準 5% で有意な関係があるが (カイ二乗検定、有効回答165人、 $\chi^2=9.598$ ,  $df=3$ ,  $p=0.022$ )、参考文献を 4-6 本挙げるとした者の利用率が最も高く (96.2%)、7-9 本とした回答者の利用率は 66.7% と一転して下落する。また、論文執筆時に用いる参考文献数と CiNii Articles 利用率の間には有意水準 5% で有意な関係は見られない (カイ二乗検定、有効回答91人、 $\chi^2=4.518$ ,  $df=4$ ,  $p=0.340$ )。

レポート執筆時に用いる参考文献の数については、CiNii Articles の利用目的、利用頻度、CiNii Articles に対する認識のいずれともほとんど有意な関係を持たない (CiNii Articles の利用目的として「レポートのため」を挙げる回答者の割合との間にのみ有意水準 1% で有意な関係があり、参考文献数が多い者の方が CiNii Articles をレポートのために用いる傾向がある。有効回答140人、 $\chi^2=11.834$ ,  $df=3$ ,  $p=0.008$ )。一方、論文執筆時に用いる参考文献数については、卒業論文目的での CiNii Articles 利用者の割合 (参考文献数が多い者の方が CiNii Articles を卒業論文のために用いる傾向がある。有意水準 5%、有効回答76人、 $\chi^2=11.776$ ,  $df=4$ ,  $p=0.019$ ) のほかに、CiNii Articles の利用頻度との間にも有意な関係がある。表19がこの関係をまとめたものであるが、11本以上、参考文献を挙げるとした回答者の間では、明らかに週1回以上、CiNii Articles を利用している者の割合が多い。前述のとおりここでいう「論文」が何

を示すかは回答者の捉え方によって異なるが、11本以上参考文献を挙げるとした回答者が想定しているのは一般的に学術論文と呼ばれる体裁を整えた、卒業論文等であり、卒業論文を執筆し始めたものが CiNii Articles も日常的に利用し始めている傾向がここからうかがえる。

表19. 論文執筆時に用いる参考文献数と CiNii Articles の利用頻度の関係 (N=76)

		参 考 文 献 数				
		1-5本	6-10本	11-15本	16-20本	21本以上
週4回以上	度数	0	0	1	0	0
	パーセント	0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%
週1-3回	度数	6	8	4	4	2
	パーセント	19.4%	28.6%	66.7%	57.1%	50.0%
月1-2回	度数	12	17	1	3	1
	パーセント	38.7%	60.7%	16.7%	42.9%	25.0%
ほぼ使わない	度数	13	3	0	0	1
	パーセント	41.9%	10.7%	0.0%	0.0%	25.0%

最後に、CiNii Articles での文献探索がうまくいかなかった場合の対応と、文献本文が入手できなかった場合の対応については、用いる参考文献数との間にほとんど有意な関係が認められなかった。唯一有意水準5%で有意であったのは、CiNii Articles での文献探索がうまくいかなかった場合、「他のデータベースで調べる」を選択する回答者の割合と論文執筆時の参考文献数の関係であったが、これも11-15本の文献を用いるとした回答者の選択率が最も高く、他は用いる文献が少ない回答者も、多い回答者も「他のデータベースで調べる」の選択率が低くなるという、一概に傾向を読み取ることのできない結果であった。

## (2) レポート・論文等に用いる参考文献の種類との関係

レポート・論文等に用いる参考文献の種類として、本研究では表5に示した9種類(「その他」を除くと8種類)を尋ねている。しかしこれら全てを分析対象に含むと作業量が膨大になる一方で、これらの中にはそれほど用いられてはいないものも多い。そこで以下では特に利用の多かった図書、Web ページ、学術雑誌論文に限定して、レポート・論文執筆等に用いる参考文献の種類と CiNii Articles 利用傾向との間の関係を分析していく。

表20はレポート執筆時に用いる参考文献の種類と CiNii Articles 認知状況の関係を

示したものである。表から、図書と学術雑誌論文をレポート執筆時に利用すると回答した者は利用しないとした者よりも CiNii Articles を知っている傾向があり、特に雑誌論文利用者は96.9%が認知していた。一方、Web ページについては利用するとした者よりも、利用しないとした者の方が CiNii Articles の認知率が高くなっている。これらの傾向はそれぞれ全て有意水準1%で統計的に有意であった（図書について…有効回答230人、 $\chi^2=15.072$ 、 $df=1$ 、 $p<0.001$ 、雑誌論文について…有効回答230人、 $\chi^2=52.146$ 、 $df=1$ 、 $p<0.001$ 、Web ページについて…有効回答230人、 $\chi^2=9.594$ 、 $df=1$ 、 $p=0.002$ ）。

このように認知率には利用する参考文献の種類による差が明確に存在する一方で、CiNii Articles を知っている者のうち、利用した経験を持つ者の割合については、利用する参考文献の種類による差は明確には存在しない。図書の利用の有無と CiNii Articles 利用経験の間にのみ有意水準5%で有意な差があり、図書を用いる者の方が CiNii Articles を利用した経験を持つ傾向があったが（図書利用者は利用率87.4%、図書非利用者は57.1%。有効回答166人、 $\chi^2=5.150$ 、 $df=1$ 、 $p=0.023$ ）、学術雑誌論文の利用、Web ページの利用と CiNii Articles 利用経験の間には有意な関係は見られなかった。

表20. レポート等執筆時に用いる参考文献の種類と CiNii Articles 認知状況の関係

	知っている	知らない	認知率(%)
図書			
利 用 (N=210)	159	51	75.7
非利用 (N=20)	7	13	35.0
学術雑誌論文			
利 用 (N=98)	95	3	96.9
非利用 (N=132)	71	61	53.8
Web ページ			
利 用 (N=87)	93	50	65.0
非利用 (N=143)	73	14	83.9

CiNii Articles の利用目的との関係については、レポート等執筆時に図書を利用するとした者は、CiNii Articles をレポートのために利用する傾向がある（図書利用者はレポートのための CiNii Articles 利用率82.5%、図書非利用者は25.0%。有効回答141人、 $\chi^2=8.295$ 、 $df=1$ 、 $p=0.004$ 。有意水準1%で有意）、レポート等執筆時に学術雑誌論文を利用するとした者は CiNii Articles をレポートのために利用する傾向がある（論

文利用者はレポートのための CiNii Articles 利用率87.1%、論文非利用者は71.4%。有効回答141人、 $\chi^2=5.327$ 、 $df=1$ 、 $p=0.021$ 。有意水準5%で有意)、という2つの傾向のみ有意であった。また、CiNii Articles の利用頻度、CiNii Articles に対する認識(どの程度参考になるか)については、レポート執筆時に利用する参考文献の種類との間には有意な関係が見られなかった。

CiNii Articles での文献探索がうまくいかなかった場合の対応については、レポート執筆等に図書を利用する者は、CiNii Articles で文献が見つからなかった場合に図書館で紙媒体の資料を調べる傾向があった(図書利用者のうち紙媒体資料を利用する者は83.5%、図書非利用者は0.0%。有効回答143人、 $\chi^2=17.680$ 、 $df=1$ 、 $p<0.001$ 。有意水準1%で有意)。また、学術雑誌論文利用者も、紙媒体の資料を調べる傾向があり(論文利用者のうち紙媒体資料を利用する者は87.2%、論文非利用者は71.9%。有効回答143人、 $\chi^2=5.225$ 、 $df=1$ 、 $p=0.022$ 。有意水準5%で有意)、CiNii Articles 以外のデータベースを利用する傾向もあった(論文利用者のうち他のデータベースを利用する者は61.6%、論文非利用者は42.1%。有効回答143人、 $\chi^2=5.257$ 、 $df=1$ 、 $p=0.022$ 。有意水準5%で有意)。Web ページ利用と文献探索がうまくいかなかった場合の間には有意な関係が見られなかった。

CiNii Articles で発見した文献に本文へのリンクがなかった場合の対応については、「その論文を図書館に探しに行く」と回答した者の割合と、「本文が入手できる論文のみを利用する」と回答した者の割合で、レポート執筆等に用いる参考文献の種類との関係が見られた。それぞれを表21、表22に示す。

表21. レポート等執筆時に用いる参考文献の種類と CiNii Articles で本文が手に入らなかった場合、図書館に探しに行く者の割合

	図書館に行く	図書館に行かない	選択率(%)
図書			
利 用 (N=139)	83	56	59.7
非利用 (N=4)	0	4	0.0
学術雑誌論文			
利 用 (N=86)	58	28	67.4
非利用 (N=57)	25	32	43.9
Web ページ			
利 用 (N=81)	39	42	48.1
非利用 (N=62)	44	18	71.0

表22. レポート等執筆時に用いる参考文献の種類と CiNii Articles で本文が手に入る文献のみを利用する者の割合

	手に入る文献のみ	手に入らない文献も探す	選択率(%)
図書			
利用 (N=138)	44	94	31.9
非利用 (N=4)	1	3	25.0
学術雑誌論文			
利用 (N=85)	24	61	28.2
非利用 (N=57)	21	36	36.8
Web ページ			
利用 (N=80)	33	47	41.3
非利用 (N=62)	12	50	19.4

CiNii Articles で文献本文が手に入らなかった場合、図書館に探しに行くか否かは、レポート執筆時の図書の利用、学術雑誌論文の利用、Web ページの利用の全てと統計的に有意な関係がある。しかし参考文献の種類によって図書館に探しに行く者の傾向は異なり、図書を利用する者は利用しない者に比べ図書館に赴く割合が多く（有効回答143人、 $\chi^2=5.693$ 、 $df=1$ 、 $p=0.017$ 。有意水準5%で有意）、学術雑誌論文を利用する者も利用しない者に比べ図書館に赴く割合が多いのに対し（有効回答143人、 $\chi^2=7.828$ 、 $df=1$ 、 $p=0.005$ 。有意水準1%で有意）、Web ページを利用する者は利用しない者よりも図書館に赴く割合が少ない（有効回答143人、 $\chi^2=7.509$ 、 $df=1$ 、 $p=0.006$ 。有意水準1%で有意）。

一方、表22に示した、CiNii Articles で手に入る文献のみを参照する者の割合は、レポート執筆時の図書の利用や学術雑誌論文の利用との間には有意な関係を持たない。しかし Web ページの利用との間には有意水準1%で統計的に有意な関係があり、レポート執筆時に Web ページを参考文献として用いる者は、CiNii Articles で手に入らない文献はあきらめる傾向が見られた（有効回答142人、 $\chi^2=7.735$ 、 $df=1$ 、 $p=0.005$ 。有意水準1%で有意）。

### （3）レポート・論文等に用いる参考文献の探索手段との関係

レポート・論文等に用いる参考文献の探索手段として、本研究では表6に示した7種類（「その他」を除くと6種類）を尋ねている。3.4(2)同様、これら全てを分析対象に含むと作業量が膨大になる一方で、これらの中にはそれほど用いられてはいないものも多い。そこで以下では特に利用の多かった図書館の検索システム、論文データベース、サー

チェンジンに限定して、レポート・論文執筆等に用いる参考文献の探索手段と CiNii Articles 利用傾向との間の関係を分析していく。

表23はレポート執筆時に用いる参考文献の探索手段と CiNii Articles 認知状況の関係を示したものである。表から、図書館の検索システムと論文データベースを利用すると回答した者は利用しないとした者よりも CiNii Articles を知っている傾向があった。この差はそれぞれ有意水準 1% で統計的に有意である（図書館の検索システムについて…有効回答230人、 $\chi^2=29.888$ 、 $df=1$ 、 $p<0.001$ 、論文データベースについて…有効回答230人、 $\chi^2=96.633$ 、 $df=1$ 、 $p<0.001$ ）。一方、参考文献として Web ページを用いる者の場合とは異なり、文献探索にサーチエンジンを用いるか否かは CiNii Articles の認知状況と統計的に有意な関係は見られなかった。

表23. レポート等執筆時に用いる参考文献の探索手段と CiNii Articles 認知状況の関係

	知っている	知らない	認知率(%)
図書館の検索システム			
利 用 (N=204)	159	45	77.9
非利用 (N=26)	7	19	26.9
論文データベース			
利 用 (N=136)	131	5	96.3
非利用 (N=94)	35	59	37.2
サーチエンジン			
利 用 (N=134)	99	35	73.9
非利用 (N=96)	67	29	69.8

また、CiNii Articles を知っている者のうち、利用した経験を持つ者の割合については、利用する探索手段の種類による差は論文データベースの場合のみ有意であった。論文データベースを用いる者（CiNii Articles 利用率94.7%）は用いない者（利用率54.3%）に比べて CiNii Articles を利用している傾向があったが（有効回答166人、 $\chi^2=37.715$ 、 $df=1$ 、 $p<0.001$ 、有意水準 1% で有意）、「論文データベース」の中には CiNii Articles 自身も含まれるため、これは当然の結果である。図書館の検索システム、サーチエンジンの利用との間には特に有意な関係は見られなかった。

CiNii Articles の利用目的については、図書館の検索システムと論文データベースの利用との間に有意な関係があった。図書館の検索システムを文献探索に用いる者は、用いない者に比べ授業・ゼミ等の発表のために CiNii Articles を利用する割合が高く（有効回答140人、 $\chi^2=5.504$ 、 $df=1$ 、 $p=0.019$ 、有意水準 5% で有意）、論文データベー

スを文献探索に用いる者は、用いない者に比べレポート（有効回答141人、 $\chi^2=12.685$ 、 $df=1$ 、 $p<0.001$ 、有意水準1%で有意）や卒業論文の執筆（有効回答141人、 $\chi^2=6.557$ 、 $df=1$ 、 $p=0.010$ 、有意水準5%で有意）のために CiNii Articles を利用している者が多かった。サーチエンジンの利用と CiNii Articles の利用目的の間には特に有意な関係は見られなかった。

CiNii Articles の利用頻度については、これも当然であるが論文データベースを文献探索に用いているとする者の間で高い傾向があった。論文データベースを用いないとする者は63.2%が「ほぼ使わない」、次いで「月1～2回」とする回答が26.3%と続くのに対し、論文データベースを用いる者は「月1～2回」が49.2%と最も多く、次いで「週1～3回」が25.8%であった。この差は有意水準1%で有意である（有効回答143人、 $\chi^2=12.156$ 、 $df=1$ 、 $p=0.007$ ）。また、CiNii Articles を「参考になる」と認知しているか否かも論文データベースを文献探索に用いているか否かと関係があり、用いていない者は「とても参考になる」を選ぶ者が1人もいないのに対し、用いている者は「とても参考になる」を34.7%の回答者が選んでいる（有効回答143人、 $\chi^2=15.525$ 、 $df=1$ 、 $p=0.001$ 、有意水準1%で有意）。ただしこれも、「論文データベースを文献探索に利用する」という者の中には CiNii Articles 利用者が含まれるのだから、論文データベースをほとんど利用しないとする者は少ないはずであり、また参考になると考えているからこそ論文データベースを用いているという、当たり前の結果である。

CiNii Articles での文献探索がうまくいかなかった場合の対応については、レポート執筆に図書館の検索システムを利用する者の間では、図書館で紙媒体の文献を調べる者が多かった。図書館の検索システムを用いる者が図書館へ赴く割合は83.9%であるのに対し、図書館システムを用いない者の場合は16.7%にとどまっている（有効回答143人、 $\chi^2=16.986$ 、 $df=1$ 、 $p<0.001$ 、有意水準1%で有意）。図書館へ赴く前には図書館の検索システムを利用するであろうことを考えれば、これは当然の結果である。

また、レポート執筆に論文データベースを用いるとする者の間でも、やはり用いない者に比べて図書館で紙媒体の資料を調べるとした者の割合が高かった。論文データベースを用いる者は、CiNii Articles での探索がうまくいかなかった場合、84.7%が図書館で紙媒体の資料も調べるのに対し、論文データベースを用いない者の間では57.9%にとどまっている（有効回答143人、 $\chi^2=7.716$ 、 $df=1$ 、 $p=0.005$ 、有意水準1%で有意）。

ただし、論文データベースを利用するとしている者の中で、CiNii Articles 以外のデータベースでも調べるとする者の割合は、論文データベースを利用しないとする者との間で有意な差が見られなかった。この結果の解釈は難しいが、そもそも「レポート等に論文データベースを利用しない」とする「CiNii Articles 利用者」がごくわずかであるため、解釈可能な分析結果が出なかったとも考えられる。

レポート執筆等にサーチエンジンを用いる者については、CiNii Articles での文献探索に失敗した場合にはインターネットで他のサイトを探す傾向があった。サーチエンジンを利用する者は34.5%がインターネット等を用いた探索を行うが、サーチエンジンを用いない者は17.9%にとどまる（有効回答143人、 $\chi^2=4.674$ 、 $df=1$ 、 $p=0.031$ 、有意水準5%で有意）。これも当然といえば当然の結果であるが、むしろレポート等にサーチエンジンを用いることがある者でも、CiNii Articles での探索が失敗した場合にインターネット上の（データベース等ではない）情報源を使う者はそれほどいない、という点が興味深い。

本説の最後に、CiNii Articles で発見した文献に本文へのリンクがなかった場合の対応についてであるが、これは特に特徴的な結果はあらわれなかった。文献探索に図書館の検索システムを用いている者は用いていない者に比べて図書館に本文を探しに行く者の割合が有意に高く（図書館の検索システムを使うは59.9%、使わない者は16.7%。有効回答143人、 $\chi^2=4.402$ 、 $df=1$ 、 $p=0.036$ 、有意水準5%で有意）、サーチエンジンを用いている者はサーチエンジンで本文を探す者の割合が有意に高いが（サーチエンジンを使う者は40.2%、使わない者は16.1%。有効回答143人、 $\chi^2=9.335$ 、 $df=1$ 、 $p=0.002$ 、有意水準1%で有意）、いずれも当然の結果である。また、CiNii Articles で本文が手に入らない文献をあきらめる傾向には、文献探索手段との間に有意な関係は見られなかった。

### 3.5 CiNii Articles に対するなじみ深さと CiNii Articles での情報探索がうまくいかなかった場合の関係

分析の最後に、CiNii Articles に対するなじみ深さと CiNii Articles での情報探索がうまくいかなかった場合の関係について述べる。

これについては、CiNii Articles の利用目的、CiNii Articles の利用頻度、CiNii Articles に対する認識と、CiNii Articles での情報探索がうまくいかなかった場合の関係を分析したが、このうち有意な関係が見られたのは利用頻度のみであった。CiNii Articles の利用頻度が多いほど、CiNii Articles で適切な文献が発見できなかった場合に他のデータベースでも調べるとする回答が多く（有効回答143人、 $\chi^2=8.898$ 、 $df=3$ 、 $p=0.031$ 、有意水準5%で有意）、また利用頻度が多いほど、CiNii Articles で発見した文献に本文へのリンクがなかった場合、その論文を図書館に探しに行く者の割合が多かった（有効回答143人、 $\chi^2=10.221$ 、 $df=3$ 、 $p=0.017$ 、有意水準5%で有意）。

## 4. 考察

第3章では CiNii Articles の利用傾向全般について述べてきた。その中でも以下では第1章で説明した本研究の主たる目的である、必要な文献が CiNii Articles では発見できなかつたり、発見した文献が CiNii Articles からリンクされていなかった場合に学生が如何に対応しているかを中心に考察を述べる。

### 4.1 学生の CiNii Articles 依存の有無

本研究の第一の目的は「学生が CiNii Articles に依存し、オンラインで入手可能なものに強く依拠するようになってきているのではないか」という推測について、質問紙調査から実際にそのような傾向があるか否かを検証することであった。

3.2節で見たとおり、回答者の過半数が CiNii Articles の利用経験を持っていた。それら利用経験のある回答者のうちの大半が、レポートや論文執筆に必要な文献が CiNii Articles で発見できなかった場合には、図書館で文献探索を行うとしている。また、他のデータベースで調べるとする学生も過半数にのぼる。一方で「あきらめる」とする回答はごくわずかであった。CiNii Articles を使ってレポート等で参照すべき文献が見つからなかった場合、そこで文献探索をあきらめてしまえばレポート等を完成することができなくなってしまう。そのため、CiNii Articles で文献自体見つからなかった場合には、なんらかの方策で追加の探索を行う者がほとんどであると考えられる。

一方で、CiNii Articles で文献の書誌情報は見つかったものの、本文へのリンクがなく CiNii Articles から入手できなかった場合の対応は、異なる傾向を見せている。その場合でも約6割の学生が図書館に紙媒体の文献を探しに行くとし、また他のデータベース等で入手できないか試みる者もいる一方で、3割以上の学生がオンラインで手に入るもののみを利用する（手に入らないものはあきらめる）としている。これはサーチエンジン等で本文が手に入らないか探すとした回答者の数よりも多い。文献が全く発見できなかった場合には、レポート等を書くことができないため追加での探索を行うが、ある程度文献が発見できた場合には、オンラインで入手できるものだけに頼ってレポート等を執筆することも（質を問わなければ）可能であり、実際に自身がそのような選択をすることがあると認識している回答者も一定数以上存在したと言える。これらの学生が常に CiNii Articles で手に入らない文献を無視しているわけではないであろうが、「CiNii Articles から手に入る文献のみでレポート等を執筆しようとする学生がいる」という推測自体は事実であったと言える。

## 4.2 調査仮説の検討

本研究では第2章で以下の3つの仮説を立てた。

- (1) CiNii Articles の利用行動と学生の学問領域の間には関係がある
- (2) CiNii Articles の利用行動と学生のレポート等執筆時の行動の間には関係がある
- (3) CiNii Articles で入手できる以上の文献を得ようとなしな傾向と CiNii Articles へのなじみ深さの間には関係がある

以下、4.1節同様に必要な文献が CiNii Articles では発見できなかつたり、発見した文献が CiNii Articles からリンクされていなかった場合の対応を中心に、(1)～(3)の仮説を検証していく。

### (1) 仮説1：CiNii Articles の利用行動と学生の学問領域の間には関係がある

学問領域との関係については、3.3節で見たとおり確かに存在する。CiNii Articles を利用しているのは人文学、社会科学、総合領域の回答者であったが、このうち人文学分野の回答者は適切な文献が発見できなかつたり、発見した文献をオンラインで入手できなかった場合に積極的に図書館に赴く傾向があった。

一方で、CiNii Articles から手に入る文献のみでレポートを執筆しようとする傾向については、回答者の学問領域による有意な差異は見られなかつた。言い換えれば、図書館等を積極的に利用するとしている人文学分野の学生であっても、場合によっては CiNii Articles から手に入る文献のみでレポート等を執筆することがあると言えるだろう。

### (2) 仮説2：CiNii Articles の利用行動と学生のレポート等執筆行動の間には関係がある

レポート執筆時に引用する文献数や引用する文献の種類、その探索手段等のうち、必要な文献が CiNii Articles では発見できなかつたり、発見した文献が CiNii Articles からリンクされていなかった場合の対応と関係するのは参考文献の種類であった。

図書や学術雑誌論文を参考文献として用いるとする学生は図書館を積極的に利用する傾向がある一方で、Web ページを引用するとした学生は引用しない学生よりも図書館に赴かない傾向がある。また、Web ページを引用するとした学生は、CiNii Articles で手に入る文献のみでレポートを執筆することがあるとした者の割合が高かつた。Web ページをレポート等の中で引用する者は、文献入手時の CiNii Articles 依存傾向が他の回答者よりも強いことがうかがえる。

### (3) 仮説3 : CiNii Articles で入手できる以上の文献を得ようとしないう傾向と CiNii Articles へのなじみ深さの間には関係がある

CiNii Articles の利用目的、利用頻度、CiNii Articles に対する認識と、必要な文献が CiNii Articles では発見できなかったり、発見した文献が CiNii Articles からリンクされていない場合の対応については、有意な傾向はほとんど見られなかった。わずかに CiNii Articles の利用頻度が多いほど、図書館に赴いたり CiNii Articles 以外のデータベースも利用するなど、文献探索に熱心である傾向が見られたのみである。

### (4) 仮説検証のまとめ

(1)~(3)の仮説それぞれ、部分的には成り立っていたものの、本研究の主眼である文献探索時の CiNii Articles 依存の点に限れば、仮説(1)、(3)については特に有意な関係は見られず、棄却される。唯一、仮説(2)については Web ページの利用と CiNii Articles で手に入る文献のみでレポート等を執筆する傾向との間に有意な関係が見られたことから、採択しうる。

以上の結果をまとめると、本研究の回答者の間では、CiNii Articles で発見した文献の中でも容易に手に入るリンクされている文献のみでレポート等を執筆することがある、とする者が一定数存在した。これらの文献入手における CiNii Articles 依存傾向は学問領域や CiNii Articles へのなじみ深さとは関係なく存在する。ただし、どのような参考文献を用いてレポートを執筆しようとするかとのみ有意な関係が認められ、Web ページをレポート等で引用しようとする学生は、より CiNii Articles で手に入る文献のみに依存しようとする傾向があった。

## 4.3 本研究の限界と今後の課題

本研究から学生の CiNii Articles 依存傾向は、主に文献入手の点において確かに存在することが認められた。第1章で述べた CiNii Articles の提供文献の限界（収録範囲や本文へのリンクが存在するものが限られる点）とあわせれば、CiNii Articles で手に入る文献のみでレポートを執筆することは問題があると考えられ、なんらかの改善(学生のリテラシー向上あるいは CiNii Articles 提供文献の拡大)が求められるだろう。

ただし、本研究はあくまで同志社大学の、主として人文社会系の学生を対象とするものである。この結果がどの程度一般化できるかについては、今後類似の調査を異なる属性を持つ他大学でも実施した上で検証する必要があるだろう。

また、本研究はあくまで質問紙調査に基づくものであり、回答者自身が自身の文献探索行動をどのように認知しているかは明らかにできても、回答者の実際の行動を明らかにできるものではない。実際に学生が執筆したレポートそのものや、レポート執筆時の

行動を観察した場合には、本人の認識以上に顕著な CiNii Articles 依存が認められる可能性もある。

さらに、本稿は「CiNii Articles で手に入る文献のみで執筆したレポート等は必要な文献を引用できていない場合がある」という前提の下に CiNii Articles 依存を問題視する文脈で議論を進めてきたが、実際には人文社会系領域においても、CiNii Articles で手に入る文献のみで執筆しても問題ないレポート課題や卒業論文のテーマ等が存在する可能性もある。

回答者の実際の行動やその執筆したレポート等の中身については、研究手法として質問紙調査法を採用している限り、明らかにすることは難しい。そこで著者らは現在、同志社大学の学生を対象に、実際にレポート課題を課し、文献探索・収集を行わせる被験者実験を実施している。この実験の結果から、学生の CiNii Articles 依存傾向について本稿の結果を補完することができると考えており、今後調査・分析を進めていく予定である。

## 謝辞

本研究は同志社大学図書館司書課程授業「図書館演習」で行ったグループワークの結果に基づくものです。質問紙調査にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

## 注

- 1 それにも関わらず CiNii Articles のアクセスログ分析において人文社会系以外の書誌情報アクセスが多い理由については、母体となる研究者等の数自体が異なる（人文社会系以外の方が多いため）ためであると考えられる。

## 参考文献

- (1) CiNii Articles について. [http://ci.nii.ac.jp/info/ja/cinii\\_articles.html](http://ci.nii.ac.jp/info/ja/cinii_articles.html), (2014-01-30 accessed).
- (2) 阿蘇品治夫. “昨日までの CiNii”. 学術コンテンツサービスのフロンティア：CiNii Books の挑戦；第13回図書館総合展. 横浜, 2011-11-10, 国立情報学研究所, 2011. [http://ci.nii.ac.jp/info/files/ja/2011forum/forum\\_2-1.pdf](http://ci.nii.ac.jp/info/files/ja/2011forum/forum_2-1.pdf), (2014-01-30 accessed).
- (3) “CiNii について | CiNii Articles 収録データベース一覧”. CiNii, [http://ci.nii.ac.jp/info/ja/cinii\\_db.html](http://ci.nii.ac.jp/info/ja/cinii_db.html), (2014-01-30 accessed).
- (4) 佐藤翔, 大向一輝, 関戸麻衣, 逸村裕. “アクセスログに基づく CiNii による本文提供とその利用状況の分析”. 2012年日本図書館情報学会春季研究集会. 三重, 2012-05-12, 日本図書館情報学会, 2012, p.73-76. <http://hdl.handle.net/2241/117031>, (2014-01-30 accessed).
- (5) “CiNii のサービスに関するアンケートご回答の集計：平成18年の結果”. CiNii, [http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result\\_2006.html](http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result_2006.html), (2014-01-30 accessed).
- (6) “CiNii のサービスに関するアンケートご回答の集計：平成19年の結果”. CiNii, [http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result\\_2007.html](http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result_2007.html), (2014-01-30 accessed).

- (7) “CiNii のサービスに関するアンケートご回答の集計：平成20年の結果”. CiNii. [http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result\\_2008.html](http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result_2008.html), (2014-01-30 accessed).
- (8) “CiNii のサービスに関するアンケートご回答の集計：平成21年の結果”. CiNii. [http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result\\_2009.html](http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result_2009.html), (2014-01-30 accessed).
- (9) “CiNii のサービスに関するアンケートご回答の集計：平成22年の結果”. CiNii. [http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result\\_2010.html](http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result_2010.html), (2014-01-30 accessed).
- (10) “CiNii のサービスに関するアンケートご回答の集計：平成23年の結果”. CiNii. [http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result\\_2011.html](http://ci.nii.ac.jp/info/ja/result_2011.html), (2014-01-30 accessed).
- (11) “CiNii のサービスに関するアンケートご回答の集計：平成24年の結果”. CiNii. [http://ci.nii.ac.jp/info/ja/a\\_result\\_2012.html](http://ci.nii.ac.jp/info/ja/a_result_2012.html), (2014-01-30 accessed).
- (12) 学術図書館研究委員会. 学術情報の取得動向と電子ジャーナルの利用度に関する調査(電子ジャーナル等の利用動向調査2007). 2009, 62p.
- (13) 佐藤翔. コンテンツ入手元として機関リポジトリが果たしている役割. 筑波大学, 2013, 博士論文. <http://hdl.handle.net/2241/118741>, (2014-01-30 accessed).
- (14) 学術図書館研究委員会. “Welcome to SCREAL Website”. <http://www.screal.jp/>, (2014-01-30 accessed).
- (15) “雑誌記事索引について”. 国立国会図書館. [http://www.ndl.go.jp/jp/data/sakuin/sakuin\\_select.html#journal](http://www.ndl.go.jp/jp/data/sakuin/sakuin_select.html#journal), (2014-01-30 accessed).
- (16) 後藤宣子. 人文学分野の論文データベース収録状況：CiNii 評価の試み. *Journal of library and information science*. 2007, vol.21, p.67-71.
- (17) 後藤宣子. 日本歴史学分野の学術論文：CiNii 収録状況. *Journal of library and information science*. 2008, vol.22, p.49-55.
- (18) 後藤宣子. 日本歴史学分野の学術論文：CiNii 収録状況の再調査. *図書館学*. 2011, no.98, p.1-8.
- (19) 日詰梨恵, 逸村裕. CiNii 収録率から見たわが国の学術情報電子化の現状：人文学4領域を対象に. *中部図書館情報学会誌*. 2010, vol.50, p.19-35.
- (20) 江草由佳, 高久雅生. 教育研究論文索引と CiNii の重複率. *情報知識学会誌*. 2011, vol.21, no.2, p.123-130.
- (21) Lawrence, Steve: “Free online availability substantially increases a paper’s impact”, *Nature*, Vol.411, No.6837, pp.521, 2001.
- (22) Swan, Alma. The Open Access citation advantage: Studies and results to date. School of Electronics & Computer Science, University of Southampton, 2010, Technical Report. <http://eprints.ecs.soton.ac.uk/18516/>, (2014-01-30 accessed).
- (23) Wagner, A. Ben. Open access citation advantage: An annotated bibliography. *Issues in Science and Technology Librarianship*, no.60. <http://www.istl.org/10-winter/article2.html>, (2014-01-30 accessed).
- (24) Xia, Jingfeng; Myers, Robekah Lynette; Wilhoite, Sara Kay. Multiple open access availability and citation impact. *Journal of Information Science*. 2011, vol.37, no.1, p.19-28.
- (25) SCREAL 委員会. “SCREAL2011調査報告：2. 電子情報資源の受容、行動、意見”. 第14回図書館総合展「SCREAL2011調査報告. 調査結果に見られる電子情報資源の現在と今後の方向」. 横浜, 2012-11-20, SCREAL 委員会, 2012. [http://www.screal.jp/SCREAL\\_20121120\\_2.pdf](http://www.screal.jp/SCREAL_20121120_2.pdf),

(2014-01-30 accessed).

- (26) 匂坂佳代子. 中小規模の理工医学系国立大学における電子ジャーナルの需要と提供の実態. 日本図書館情報学会誌. 2011, vol.57, no.4, p.141-160.
- (27) 佐藤翔記録. 対談再録 和田敦彦 (早稲田大学教授)×江上敏哲 (国際日本文化研究センター) 国境を越えた知の流通 過去・現在・未来—海外の日本図書館から考える—. リポート笠間. 2012, no.53.
- (28) “CiNii : 電源設備点検による停電に伴うサービス停止…そして阿鼻叫喚へ #cinii”. Together. 2012-11-04. <http://togetter.com/li/401849>, (2014-01-30 accessed).

(さとう しょう。

もり まさき。

ささい りえ。

ふるがわ まよ。

はまぐち みか。

いのうえ ゆきこ。

2014年2月9日受理)





Q13. CiNii で Articles 必要な論文・参考になりそうな論文が見つからない場合、あなたはどのようにしますか。(複数回答可)

1. 図書館で図書・雑誌などの紙媒体の文献を調べる
2. CiNii Articles 以外のデータベースで調べる
3. インターネットで類似しているサイトを探す
4. あきらめる
5. その他 ( )

Q14. CiNii Articles での検索の結果、必要な論文・参考になりそうな論文が見つかったとします。その論文の本文を CiNii Articles のリンク先等から入手できない場合、あなたはどのようにしますか。(複数回答可)

1. その論文を図書館に探しに行く
2. 他のデータベースを利用して本文が入手できないか探す
3. サーチエンジン等を利用して本文が入手できないか探す
4. 本文を入手できる論文のみを利用する(本文が入手できるものがなければあきらめる)
5. その他 ( )

Q15. 次の表から、CiNii Articles 以外の電子ジャーナル掲載データベースで「知っている」または、「使ったことがある」ものに○をつけてください。

		知っている	使ったことがある
1	国立国会図書館サーチ		
2	AIDE (アジア経済研究所出版物アーカイブ)		
3	同志社大学学術リポジトリ (研究紀要論文)		
4	同志社大学学術リポジトリ (貴重書)		
5	JDreamIII (株式会社ジー・サーチが提供する科学技術や医学・薬学関係の国内外の文献情報を検索できる) (JDreamII を含む)		
6	J-STAGE (科学技術振興事業団 (JST) 運営の自然科学関連の全文データベース) (Journal @rchive を含む)		
7	国文学論文目録データベース (国文学研究資料館提供の国文学関連の索引データベース)		
8	magazineplus (日外アソシエーツ提供の人文社会関連の索引データベース)		
9	メディカルオンライン ライブラリー (国内の学会・出版社発行の雑誌に掲載された医学関連分野の文献が検索可能)		
10	大宅壮一文庫雑誌記事索引検索 (週刊誌・総合誌・女性誌などの記事検索が可能)		

		知っている	使ったことがある
11	雑誌記事索引集成データベース（皓星社提供の雑誌記事索引集成の索引データベース）		
12	JAIRO（日本の学術機関リポジトリに蓄積された学術情報を横断的に検索できる）		
13	Google		
14	Google Scholar		
15	Yahoo!		
16	Yahoo! 論文検索		
17	Bing		
18	J-Global		
19	その他（Q16 に詳細記入）		

Q16. その他知っている・利用したことがある電子ジャーナルデータベース等がありましたら教えてください。

・知っている

・利用したことがある

Q17. あなたの学部、学科、回生を教えてください。

（            ）学部    （            ）学科    （    ）回生

最後に、秋学期に今回のアンケートに関連するサンプリング調査の実施を予定しています。協力していただける方は、よろしければ連絡先の記入をお願いいたします。（学内メールアドレスでも結構です）

※記入していただいた連絡先は、当調査に関する連絡以外では一切使用いたしません。

以上です。ご協力ありがとうございました。